

■都市におけるデザインの意義・役割を、イギリスから学ぶ

2009年12月12日 (株) ディーワーク 藤沢毅

景観法の施行以降、全国一律から地域の固有性重視へと景観施策がシフトした日本では、都市再生・団地再生において、個性的に景観形成・誘導するデザインの役割が重要視されてきている。景観形成・誘導ツールとなるデザインガイドラインの策定は、計画設計の専門家に委ねられ、集住研等計画設計事務所スタッフは、誘導すべき都市のデザイン要素（ランドスケープや建築、色彩、サイン、照明など）にまつわるテーマを探りつつ、まちの価値向上に資する手掛かりを模索しているものと思われる。

都市におけるデザインの意義：まちをトータルに捉えるデザインの考え方を獲得するために

- ・イギリスの再生理念『都市文脈の尊重：地域の個性と伝統様式の継承』は、日本でも基本的事項として重視され、多くの再生事業で語られているが、理想的で実現し得ない建前としての存在となっている。極論すれば、ビジョン・コンセプトでこうした理想を掲げ、デザインガイドでは、地域材のアクセント的活用が地域の個性であり、樹木等の保全を伝統継承と関係づける貧弱な力技でお茶濁しする現状がある。
- ・東京を歩くと、路上に溢れる自転車や展示物、電柱・電線、看板・垂れ幕・旗に圧倒される。欧州大都市の佇まいとはまるで違う。美意識では劣ることのない日本のはずが、都市景観に関してはまるでダメであることを感じる。こうした無秩序な路線商店街や繁華街の光景に馴染む自分を発見したりすると、都市デザインに臨むスタンスを見失うこととなる。だからこそ、彼我の歴史を堅実に学ぶ必要を感じる。

都市におけるデザインの役割：目指すべきまちの将来像を実現するためのデザイン誘導であるために

- ・イギリスでは、都市再生の開発計画策定でのマスタープランの役割が近年重視されている。空間デザインの青写真としてではなく、社会的、経済的、物的な都市文脈を整理するためのツールとして、また様々な変化のプロセスを検証し、空間質の向上を確認するツールとして、マスタープランを位置づけている。
- ・空間マスタープランは『建物、空間、土地利用、交通の3次元的な提案を説明するものであり、これらの提案と実現戦略との整合をはかるもの』であると、「アーバンルネッサンスにむけて：アーバントクスフォーオース。ODPM.1999」では定義している。これを受けて、マスタープラン作成の原則・工程・手順・実施運営等をガイドする「成功するマスタープランの作り方：CABE.2版 2008」が発行されている。ここでは、マスタープランが必要とされる局面や成功するクライアントになるための鍵などを解説し、良好なデザイン作法（個性・可変性・多様性などの品質性）や、良好な空間が経済的・社会的価値を生む関係性など、デザインのあり方がまちの個性や快適性に強く関わることを情報発信している。
- ・専門家達がテーブルを囲み、図面を広げ、まちの将来を想起しながら、ニュータウンや団地設計に取り組んだ団地計画隆盛期を思い出して（あるいは50歳以上集住研メンバーに聞いて）欲しい。そこでは、まちの目印となる遠景（視点場）や、場所性・らしさを創る近景（街並みやシークエンス）、良質なデザインを付与する狙いや思い（きらりと光るアイデア）、良質性をバランスさせる枠組み工夫（ダイヤグラム）などを熱く語り合ったはずである。これこそが望ましい空間マスタープラン作成プロセスであり、こうした多能工的共同作業こそが、現在の都市再生・団地再生に求められるプロセスでもある。
- ・団地計画ノウハウの一つに住棟配置図（構想・基本等）がある。土地利用や街路街区などの開発計画をベースに、地形や地域の特性を読み込み、まちの将来像を示す配置図（開発概念図・マスタープラン）を作成する専門家集団として集住研の役割がある。確かに集住研を取り巻く業務環境は沈滞化し、スタッフは高齢化し、経営陣は疲弊している。しかし、集住を軸とした空間デザインのノウハウが豊富であることを思い出し、良質な空間立案の専門家として、こうした団地経験・情報を整理し、伝達・継承することこそが、集住研ができる社会貢献であり、『美しい住宅が美しい都市を創る』職能集団として社会認知される一歩を踏み出すべきであるとの思いを、今回のイギリス講座を通して強く感じた。



計画都市再考：ミルトンケインズ

最初のマスタープランは、計画期間を終え、今後20～30年を見据えて、都市を導いていく新しい考え方のマスタープランが求められている。それは、既存の構造を破壊することなく、複合用途を推進し、公共領域のリニューアルを通して、明確な場所の特性を再考するものだ。出典：「成功するマスタープランの作り方」